

「12・2」——小説『人間革命』の執筆開始

導入部

12月2日は、池田先生が小説『人間革命』の執筆を開始した日です。創価学会の眞実と、信仰に目覚めた人々の蘇生のドラマ、そして師弟不二の精神を描いた、『人間革命』『新・人間革命』。この執筆に込められた師の思いを学んでいきましょう。

1枚目／小説『人間革命』のテーマ（7枚目の絵の裏に貼る）

1964年（昭和39年）12月2日、池田先生は小説『人間革命』の執筆を開始しました。

この小説のテーマについて、池田先生は第1巻の「はじめに」で次のように述べています。

「一人の人間における偉大な人間革命は、やがて一国の宿命の転換をも成し遂げ、さらに全人類の宿命の転換をも可能にする。——これが、この物語りの主題である」

2枚目／平和原点の地・沖縄で執筆開始（1枚目の絵の裏に貼る）

「戦争ほど、残酷なものはない。

戦争ほど、悲惨なものはない」

この言葉で始まる小説『人間革命』「黎明」の章の執筆は、日本で唯一、太平洋戦争の地上戦が行われ、多くの一般市民が犠牲となった沖縄で開始されました。

そこには、戦争の惨禍を刻んだ沖縄の地から、戦争の悲惨さ、愚かさを世界に向けて明確に伝え、人類の平和と幸福の夜明け（黎明）を開きゆこうとの、『人間革命』の執筆にかかる、池田先生の強い決意が込められていたのです。

3枚目／妙悟空と法悟空（2枚目の絵の裏に貼る）

第二代会長・戸田先生は、亡くなる8か月前の昭和32年（1957年）8月、池田先生とともに軽井沢の地を訪れます。その頃、戸田先生が執筆した小説『人間革命』が発刊されたばかりでした。軽井沢での師弟の語らいのなかで池田先生は、この『人間革命』の続編とも言うべき戸田先生の伝記を書き残し、その生涯と精神を顕彰しゆくことを決意したのです。

戸田先生が「妙悟空」というペンネームで『人間革命』を執筆されたのに対し、池田先生は『法悟空』のペンネームを使われています。池田先生は「（仏法の原理からいえば）妙は師、法は弟子となる。私の師は戸田先生である」とつぶっています。まさに師弟不二の精神に貫かれたペンネームなのです。

4枚目／師弟不二の闘争を描いた真実の書（3枚目の絵の裏に貼る）

『人間革命』は、戦後、戸田先生が創価学会の再建に一人立ち、75万世帯の弘教という誓願を達成し、後継の弟子・山本伸一（池田先生）が第三代会長に就任するまでの創価学会の歴史を描いています。その執筆は、広布の指揮をとる激務の合間をぬって行われました。時には、執筆を続けるため、高熱をおして口述することもありました。

このようにして執筆された『人間革命』は全12巻で完結しています。

5枚目／小説『新・人間革命』の執筆開始（4枚目の絵の裏に貼る）

1993年（平成5年）8月6日、原爆投下から48年が過ぎたこの日、池田先生は『人間革命』の続編である小説『新・人間革命』の執筆を軽井沢の地で開始しました。この小説は、次のような書き出しで始まります。

「平和ほど、尊きものはない。

平和ほど、幸福なものはない。

平和こそ、人類の進むべき、根本の第一歩であらねばならない」

6枚目／限りある命の時間との壮絶な闘争 (5枚目の絵の裏に貼る)

池田先生は小説『新・人間革命』第1巻の「はじめに」で、次のように記しています。

「『新・人間革命』は、完結までに三十巻を予定している。その執筆は、限りある命の時間との、壮絶な闘争となるにちがいない。(中略) 私も、『新・人間革命』の執筆をわが生涯の仕事と定め、後世のために、金剛なる師弟の道の『真実』を、そして、日蓮大聖人の仰せのままに『世界広宣流布』の理想に突き進む尊き仏子が織りなす大絵巻を、力の限り書きつづってゆく決意である」

7枚目／世界で愛読される小説『人間革命』『新・人間革命』 (6枚目の絵の裏に貼る)

小説『人間革命』『新・人間革命』は、日本の新聞小説で連載回数が最多となりました。また、数多くの言語に翻訳され、世界中の友に勇気と希望の光を送り続けています。

わたしたちも創価学会の正義の歴史と三代会長の師弟不二の精神を学んでいきましょう。

決意など